

専門演習2 「行動科学と計量社会学」

目的と日程

社会学科 村瀬洋一 murase@rikkyo.ac.jp

1. 演習3年次の目的

- 1) 批判的精神を持ち、真実とは何か自分で判断できる能力を身につける
- 2) 討論、発表、文章の組み立て、調査実施、データ分析能力の修得
- 3) 論理的に考え、調査と分析により自分独自の成果を発表する能力の修得

2. 主な内容

- 1) テキストや学術論文をもとに発表と討論。知識の暗記でなく、学問の考え方を理解し、自分で理論や仮説を作ることを重視。また、研究の最新状況を把握する。
- 2) 情報収集法や発表法などの「仕事の進め方」、「知的生産の基礎技術」の全般的訓練
- 3) 各自が自分の興味関心にしたがってテーマを設定し、小研究（ゼミ論）を実施
既存の調査データを分析して発表と討論
- 4) データ分析結果の発表（重回帰分析、因子分析などの多変量解析の実習）

3. 日程（予定。参加者の様子を見て変更の可能性あり。前期14回、後期14回。）

| 日程 | 回 | 内容 |
|--------|-----|--|
| 4月15日 | 1 | 演習の概要と予定 ★課題 自分のテーマについてと、1章感想をメールで村瀬まで 4月20日締め切り <u>メールには名前と学生番号を書く</u> 次週準備、テキスト買う、ゼミ飲み、ゼミ報告書、忘れずに |
| 4月22日 | 2 | 学術論文の発表：学会誌掲載の論文を要約すること |
| 4月29日 | 3 | テキスト2章 オンライン・データベースについて 祝日授業日が多いので注意 |
| 5月6日 | 4 | テキスト4章 文献検索法について |
| 5月13日 | 5 | テキスト5章 各自のホームページ作成 |
| 5月20日 | 6 | テキスト6章 クロス集計とエラボレイションについて |
| 5月27日 | 7 | テキスト その他 この回以降、テキストの発表後に、自分の仮説や先行研究について発表 |
| 6月3日 | 8 | 分析実習SPSS |
| 6月10日 | 9 | 分析実習SPSS |
| 6月17日 | 10 | テキスト その他 |
| 6月24日 | 11 | テキスト その他 |
| ★ゼミ合宿 | | ゼミ論と卒論の構想発表予定 |
| 7月1日 | 12 | 分析結果発表 平均値とクロス集計 |
| 7月8日 | 13 | 分析結果発表 平均値とクロス集計 |
| 7月15日 | *** | 学会のため休稿 ** |
| 8月2日 | 14 | 補講 分析結果発表 ***** 夏期休業 ***** |
| 9月23日 | 15 | 分析実習 重回帰分析 |
| 9月30日 | 16 | 分析実習 重回帰分析 |
| 10月7日 | 17 | テキスト その他 |
| 10月14日 | 18 | 学術論文の発表 |
| 10月21日 | 19 | 分析実習AMOS |
| 10月28日 | 20 | 分析実習AMOS |

| | | | |
|--------|-------|---------------|------------|
| | ***** | 秋期休業 | ***** |
| 11月11日 | 21 | 分析結果 中間発表会 | 重回帰分析とパス解析 |
| 11月18日 | 22 | 分析結果 中間発表会 | 重回帰分析とパス解析 |
| 11月25日 | 23 | 学術論文の発表 | |
| 12月 2日 | 24 | 学術論文の発表 | |
| 12月 9日 | 25 | 学術論文の発表 | |
| 12月16日 | 26 | 学術論文の発表 | |
| | ***** | 冬期休業 | ***** |
| 1月13日 | 27 | ゼミ論発表 仮説と分析結果 | |
| 1月20日 | 28 | ゼミ論発表 仮説と分析結果 | |

注 発表者は資料を作成し人数分コピーすること。資料は必ずA4版で印刷。

6月下旬（予定）ゼミ合宿 ー全学年合同。3、4年のゼミ論、卒論構想発表会

テキストは必ず購入すること。 学術書は一般の本屋にはないので立教の書店で買うか早めに注文すること。

4. 面会時間、ホームページとeメール

恒常的にeメールでの連絡をするので、立教メールから自分が使うメールに転送設定をすること。Vcampusの説明をよく読む。また、Vcampusの別名（エイリアス）設定をするとよい。立教大学のホームページからVcampusページを選び、解説をよく読む。なお以下の村瀬ゼミページに最新情報を掲載するので見てください。

<http://www.rikkyo.ac.jp/web/murase>

演習内容に関して質問等があれば、演習中の質問も大歓迎しますが、下記までeメールを出しても良い。ただし、成績に関する質問や陳情はご遠慮ください。名前がないメールが多いのですが、必ず自分の名前を明記してください。

村瀬の研究室は12号館3階です。面会時間（Office hours: 木曜12:15-1:15）は研究室を開放しているので、質問などあれば自由に来てください。研究室のドアに、村瀬の都合の良い時間がはってあります。ふだんは研究・教育活動のため多忙なので、来訪の際はメールをしてからの方が行き違いが少ないでしょう。

5. 注意点

やる気のある人ならば誰でも歓迎です。最後までゼミをやり通し、卒論を書いてください。バイトやサークル等をゼミよりも優先することはないように。他学部を含め、他のさまざまな講義も積極的に受講して視野を広げ、数学や統計学の基礎訓練や社会情報処理、英語なども身につけてるとよい。全カリの情報処理関連の科目もおすすめです。

毎日、新聞やテレビニュースを見て、様々な雑誌に目を通すなど、自分の世界を広げる努力をしてみてください。大学外の、現実の社会と接する努力をすることを、とくにおすすめます。

『社会学評論』や『理論と方法』、『社会心理学研究』、『ソシオロジ』などの学術雑誌の他、英文論文も積極的に読むこと。*American Sociological Review*, *American Journal of Sociology*, *American Political Science Review*などの過去数年分の目次を見て論文をコピーする。

調査実習の訓練は「応用調査実習」等の時間に行う。履修要項の社会調査士に関する記述を読み関連科目を取る。遅刻や無断欠席は厳禁。欠席は、必ず事前にメールで連絡する。

6. テキストと参考書の解説

テキストは各自で必ず購入する。参考文献も、自分が興味を持てるものはできる限り購入し、自宅で読みたいときにすぐ読める状態にしておく。

学生時代は贅沢はつつしむ一方、本代と食事代は惜しまないことをお勧めする。本代は知識を、食事代はあらゆる仕事の基礎となる体力を養うために必要。

以下、★印は村瀬の解説。

6.1. テキスト

白波瀬佐和子. 2006. 『変化する社会の不平等』東京大学出版会.

盛山和夫他. 2011. 『日本の社会階層とそのメカニズム ー不平等を問い直す』白桃書房.

6.2. 参考書

赤川学. 2004. 『子供が減って何が悪い！』筑摩書房.

ボンシュテット・ノーキ著＝海野道郎・中村隆監訳. 1990. 『社会統計学 ー社会調査のためのデータ分析入門』ハーベスト社.

文春新書編集部編. 2006. 『論争 格差社会』文藝春秋.

中央公論編集部編. 2001. 『論争・中流崩壊』中央公論新社.

★不平等に関する議論をよくまとめている。

ロバート＝C＝クリストファー. 1983. 『ジャパニーズ・マインド』講談社.

★やや古いが、外国人による日本社会論の中ではとてもよくできている。

土場学編. 2004. 『社会を“モデル”でみる ー数理社会学への招待』勁草書房.

Flanagan, Scott C. and Bradley M. Richardson. 1977. *Japanese Electoral Behavior*. Sage Publications. =中川融監訳. 1980. 『現代日本の政治』敬文堂

★政治に対する人間関係のネットワークが政治に対して与える影響について論じている。

原純輔. 1981. 「階層構造論」. 安田三郎・塩原勉・富永健一・吉田民人編. 『基礎社会学 4 : 社会構造』東洋経済新報社.

原純輔・盛山和夫. 1999. 『社会階層 豊かさの中の不平等』東京大学出版会.

原純輔他編. 2000. 『日本の階層システム』1～6巻. 東京大学出版会.

★1995年SSM調査の分析結果をもとにした論文集。

原純輔編. 2002. 『流動化と社会格差』ミネルヴァ書房.

橋本健二. 2003. 『階級・ジェンダー・再生産 ー現代資本主義社会の存続メカニズム』東信堂.

服部民夫・船津鶴代・鳥居高編. 2002. 『アジア中間層の生成と特質』アジア経済研究所.

林信吾. 2005. 『しのびよるネオ階級社会 ー“イギリス化”する日本の格差』平凡社.

樋口美雄・財務省財務総合政策研究所. 2003. 『日本の所得格差と社会階層』日本評論社.

★日本の格差についての論文集だがやや保守的。

本田由紀. 2009. 『教育の職業的意義ー若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房.

今田高俊. 1989. 『社会階層と政治』東京大学出版会.

蒲島郁夫. 1988. 『政治参加』東京大学出版会.

鹿又伸夫. 1987. 「『社会階層と移動』研究における産業化命題の再検討」. 現代社会学』13巻1号.

鹿又伸夫. 1997. 「戦後日本における世代間移動の変動 (特集 社会階層の計量分析)」. 『行動計量学』24巻1号:20-27.

鹿又伸夫. 2001. 『機会と結果の不平等』ミネルヴァ書房.

荻谷剛彦. 2001. 『階層化日本と教育危機 ー不平等再生産から意欲格差社会(インセンティブ・ディバイド)へ』有信堂高文社.

小林淳一・木村邦博編著. 1991. 『考える社会学』ミネルヴァ書房.

★初学者が実証的な社会学を学ぶために、よくできた本。

小林淳一・木村邦博編著. 1997. 『数理の発想で見る社会』ナカニシヤ出版.

高坂健次・厚東洋輔編. 1998. 『講座社会学1 理論と方法』東京大学出版会.

★社会学理論の最新状況について解説。

三船毅. 2008. 『現代日本における政治参加意識の構造と変動』慶應義塾大学出版会.

三浦展. 2005. 『下流社会 ー新たな階層集団の出現』光文社新書.

★あとがきにあるようにデータは偏っている。分析も多くは不適切だが、おもしろい部分もある。

宮野勝. 1986. 「誤答効果と非回答バイアス：投票率を例として」. 『理論と方法』Vol.1 No.1:101-114, ハーベスト社.

宮川公男・大守隆編. 2004. 『ソーシャル・キャピタル ー現代経済社会のガバナンスの

- 基礎』東洋経済新報社。
- 村上泰亮．1984．『新中間大衆の時代』中央公論社。
- 村瀬洋一．2006．「階級階層をめぐる社会学」宇都宮京子編『よくわかる社会学』ミネルヴァ書房。
- 中谷美穂．2005．『日本における新しい市民意識：ニュー・ポリティカル・カルチャーの台頭』慶應義塾大学出版会。
- 中野雅至．2006．『格差社会の結末 富裕層の傲慢・貧困層の怠慢』ソフトバンク新書。
- 直井優他編．1990．『現代日本の階層構造』第1～4巻．東京大学出版会。
- 直井優・原純輔・小林甫編．『リーディングス日本の社会学8：社会階層・社会移動』東京大学出版会。
- 大竹文雄．2005．『日本の不平等』日本経済新聞社。
★橋木に反論し日本は平等だとしている。
- 大竹文雄．2010．『日本の幸福度一格差・労働・家族』日本評論社。
- 佐藤俊樹．『不平等社会日本 一さよなら総中流』中央公論新社。
- レイブ・マーチ著＝佐藤嘉倫・大澤定順・都築一治訳．1991．『社会科学のためのモデル入門』ハーベスト社。
- 盛山和夫他．2005．『「社会」への知 現代社会学の理論と方法 上下巻』勁草書房。
- 盛山和夫．2011．『経済成長は不可能なのか一少子化と財政難を克服する条件』中央公論新社。
- 数土直紀．2010．『日本人の階層意識』講談社。
- 数土直紀・今田高俊．2005．『数理社会学入門』勁草書房。
- 曾良中清司．1983．『権威主義的人間 一現代人の心にひそむファシズム』有斐閣。
- 橋木俊詔．1998．『日本の経済格差』岩波書店。
★所得や資産の格差を分かりやすく解説した新書。近年の日本社会は先進諸国の中でも格差が大きく、経済的に平等な社会とは言えないと主張している。
- 橋木俊詔．2004．『封印される不平等』東洋経済新報社。
- 橋木俊詔．2006．『格差社会 何が問題なのか』岩波書店。
- 田辺俊介．2011．『外国人へのまなざしと政治意識一社会調査で読み解く日本のナショナリズム』勁草書房。
- 谷口尚子．2005．『現代日本の投票行動』慶應義塾大学出版会。
- 谷岡一郎．2000．『「社会調査」のウソ 一リサーチ・リテラシーのすすめ』文芸春秋。
★世間一般の調査の問題点について分かりやすく解説した新書。
- 谷岡一郎，仁田道夫，岩井紀子編．2008．『日本人の意識と行動：日本版総合的社会調査 JGSSによる分析』東京大学出版会。
- 富永健一．1979．『日本の階層構造』東京大学出版会。
- 友野典男．2006．『行動経済学 一経済は「感情」で動いている』光文社新書。
- Verba, Sidney. Norman H. Nie. Jae-on Kim. 1978. *Participation and Political Equality: A Seven-Nation Comparison*. Cambridge University Press.
＝三宅一郎・蒲島郁夫・小田健訳．1981．『政治参加と平等 一比較政治学的分析』東京大学出版会。
★社会的地位と政治参加や政治的影響力について、国際比較調査をもとに論じた名著。
- 和田英樹．2006．『「新中流」の誕生 一ポスト階層分化社会を探る』中公新書。
- 山口二郎．2004．『戦後政治の崩壊 一デモクラシーはどこへゆくか』岩波書店。
- 安田三郎．1971．『社会移動の研究』東京大学出版会。
★日本社会の開放性に関する代表的研究。
- 安田三郎・海野道郎．1977．『改訂2版 社会統計学』丸善。
- 安田三郎・原純輔．1982．『社会調査ハンドブック（第3版）』有斐閣．2200円。
★同様のタイトルの本は多数あるが、これが内容的にもっとも整備されている。
- 寄本勝美．2003．『リサイクル社会への道』岩波新書。
- 与謝野有紀編．2006．『社会の見方、測り方 一計量社会学への招待』勁草書房。
- 和田秀樹．2006．『新中流の誕生』中央公論新社。
- 2005年SSM調査研究会．2008．『2005年SSM調査シリーズ』第1～15巻．2005年SSM調査研究会。
★SSM調査の報告書論文集。社会階層に関する最先端の研究結果が掲載。

7. 社会調査士資格について

調査と分析の能力のある人に対して資格を与える制度。単位を取るだけで資格取得できる。現実社会を調査し分析する能力が身につく、自分の訓練のためにはとても良いので、積極的に取り組むこと。履修要項を見て、関連科目を積極的に履修する。

8. 卒業論文の作成

自分の興味関心にしたがってテーマを設定し卒業論文を作成する。論文作成によって、問題設定、調査、分析、考察の能力を身につける。3年次で得た能力をさらに発展させるとともに、1年間を通した仕事の進め方を身につけること。

4月～5月 文献リスト作成、レビュー論文を読む（就職活動と平行して進めること。時間の使い方を工夫するのも大切な訓練。）

6月～7月 テーマと仮説を明確にし、卒業論文の大まかな目次を作る。8月中に、卒業論文構想発表会を行う。テーマをしぼって先行研究をさらに読む。

8月～9月 調査実施、分析開始。調査をする場合、10月中には終わるように。

10月～12月 卒業論文本文執筆。★11月20日頃に卒論仮提出。12月下旬卒論提出。

9. 成績評価

成績は、発表の成果と討論の参加具合、課題によって決定する。討論に積極的に参加し、演習の発展に貢献した者、良い質問をした者は記録し高得点を付ける。発表内容が良かった者も、もちろん高評価となる。

10. 引用法と盗作について

引用と盗作は違うものである。引用は自由だが、必ず引用元を書かなくてはならない。レポートや論文作成の際に、引用元を書かずに引用すれば、盗作したことになるので、十分に注意すること。最近、ネット上の文章をそのままコピーしてレポートで使う例も増えているが、これも完全なルール違反である。

他人の文章を、自分の文章であるかのように書くと盗作になるが、悪気はなくとも、引用元を明示せずに盗作になっているものが時々見られる。レポートや卒論等で、他人の文書を引用するときは、必ず引用部分を「」でくくり、引用の前に、引用元を書くこと。それ以外の形式で引用してはいけない。また、必ず「引用元」を明示すること。引用元を書かずに引用すると、盗作したことになるので、著作権法に反し、学問上、重大なルール違反となる。引用は自由だが、盗作してはいけない。

他人の文章を引用するときは、山田(2006: p.27)によれば、「〇〇」である、などのように、必ず引用元を先に書くこと。

★文献リストの形式 — 著者名と発行年を必ず最初に書く。発行年は半角数字で。その後、「論文名」『本や雑誌名』と発行所を書くこと。論文名は一重かっこ、本や雑誌名は二重かっこを使う。著者名のアルファベット順にする。上記の参考文献や、テキスト巻末の文献リスト形式を参照。

11. ネット上の情報について

ネット上の情報や、ネット上の事典、ウィキペディア、各種ブログやネット上データは、基本的に「ガセネタ」も多く信憑性が低い。ウィキペディアなどネット情報は、ウソも自由に書き込めるし、個人が趣味で作った文章で正確なチェックはなく、信用できない情報が多い。また、すぐに消えてしまう情報も多いので、研究において使うべきではない。必要な情報は、本として出版されているものから引用すること。本として出版されたものは、編集者のチェックもあり信用度は高い。

また、ネット上にあるグラフを、そのままコピーして自分のレポートで使うことは、図やデザインの無断使用となるので著作権法違反である。自分でデータの数字を入手して、グラフを自分で作り直すこと。

多くの場合、最新のデータは本や統計資料となっているので、データを調べる時は、必ず図書館へ行くこと。データ検索をネットのみですませることは、絶対にしてはいけない。図書館の参考室には、各種の事典や図鑑、数十冊からなる百科事典もある。まず図書館で、きちんとした百科事典の索引を見て、使ってみると良い。信用できる統計データも、ネット上に少しはある。村瀬ゼミホームページの「文献や統計リンク集」などを見ることが。調査データについては、SRDQ（社会調査データベース）や、SSJデータアーカイブなどを見ることが。リンク集の中にある。

12. 文献検索について

立教内LANに接続されているパソコンであれば、無料で使えるオンラインデータベースが各種ある。図書館ホームページの解説をよく読むことが重要。学術雑誌内の目次情報

や、新聞記事検索が可能（学内のみ）。まずは、以下を使いこなすとよい。

- ・日本社会学会ホームページ 文献情報データベース
- ・国立国会図書館ホームページ 「雑誌記事索引」
- ・サイニイ (CiNii 論文情報ナビゲータ 学術雑誌目次等)
- ・SocINDEX with Full Text (立教図書館ホームページ 雑誌記事全文 より使える)

学会が出している学術雑誌を読むことは重要。新しいものはデータベースに入っていないので、紙の目次を見ること。日本社会学会が年4回出す雑誌は『社会学評論』である。

『社会学研究』、『社会心理学研究』、『理論と方法』なども手にとってみること。

★日本社会学会『社会学評論』など本文が出るものもあるが、最新版は紙しかない。

13. 村瀬の研究例 — 平等に関する意識の規定メカニズム

1) 目的

不平等に関する意識 — 規定要因を解明

都市—農村による違い

年齢による違い

主な仮説

- ・高年齢 — 伝統的価値観が多い
- ・高学歴 — 実力主義的なので平等を否定
- ・農村部 — 伝統的価値観が多い

2) データ

東京、仙台、宮城県郡部（仙北郡部）

母集団 20歳～70歳未満男女

抽出法 選挙人名簿からの二段無作為抽出法

計画標本数 個人を抽出単位として1500人×3

回収率 仙台70% 仙北郡部64% 東京55%

調査時期 仙台1997, 仙北1998, 東京1999年

ソウル、テグ、チュンチョン（農村部含む）調査

母集団 20歳以上男女

抽出法 地図上での二段無作為抽出法

計画標本数 個人を抽出単位として1600人×3

回収率 62, 62, 63%

調査時期 ソウル2003, テグ2004, 春川2007

3) 分析結果

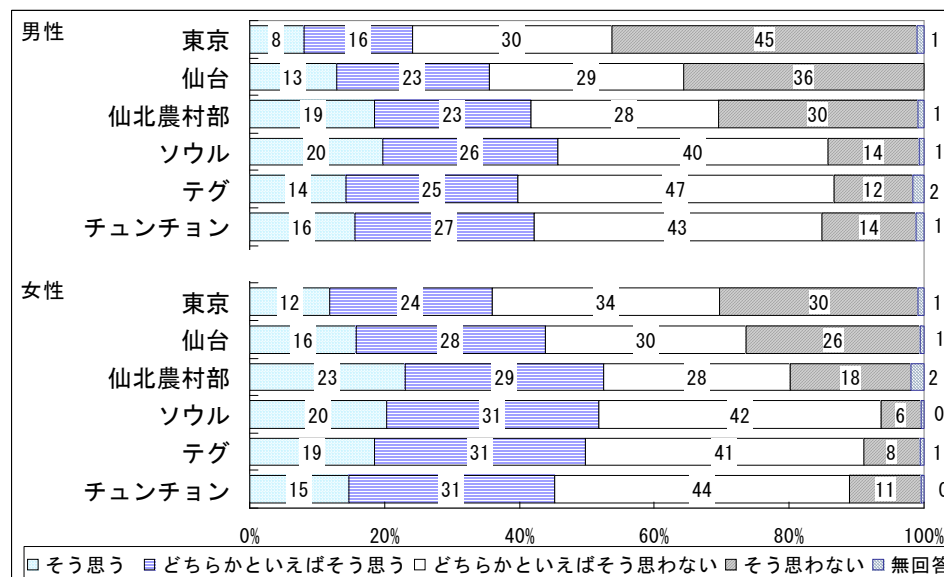


図1 すべての人が同程度の収入を得るような社会が望ましい

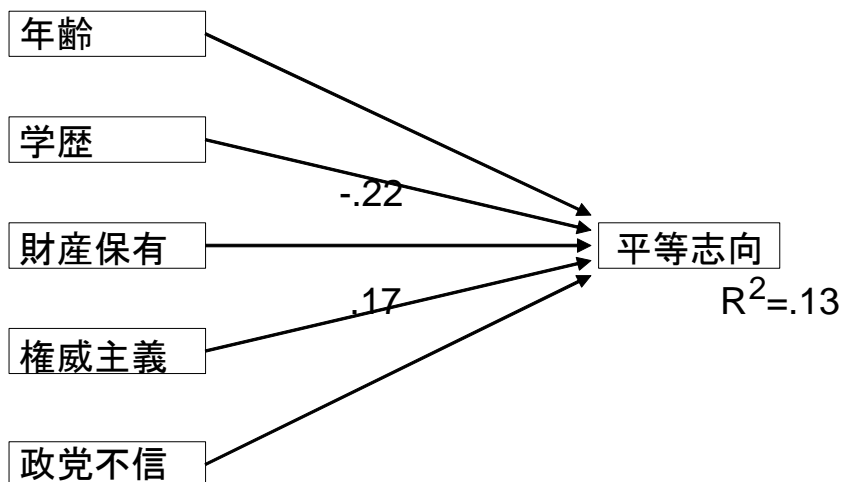
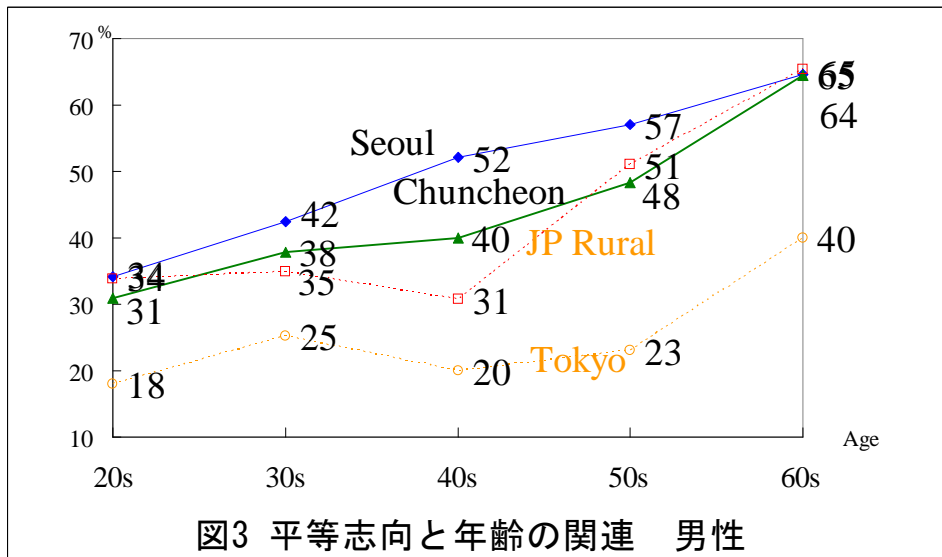
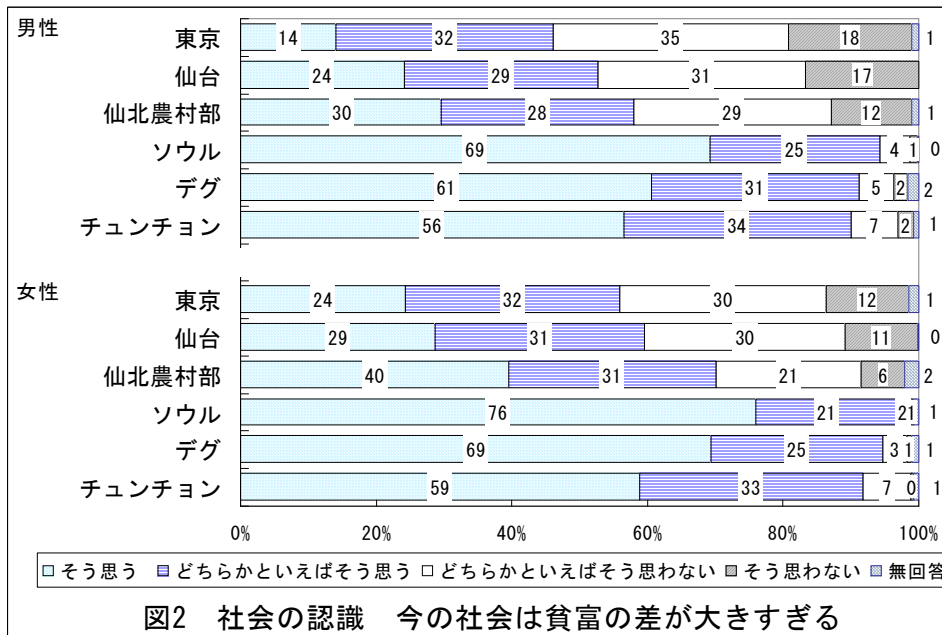
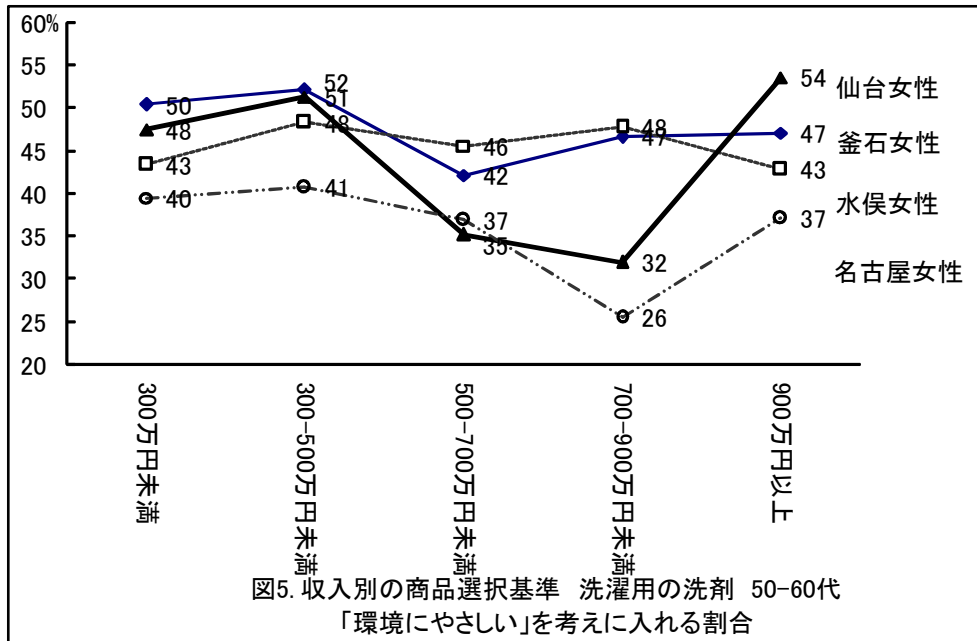


図4 平等志向の規定因 重回帰分析 東京男性



4) 結論

平等志向の規定因

- ・ 日本 学歴、権威主義
- ・ 韓国 年齢、財産保有

韓国の方が平等志向が強い。

平等志向と年齢は明確な関連がある。

国際比較のポイント

- ・ 格差の種類 貧富、都市度、地域、人種
特定層への富の集中
- ・ 産業化の程度
- ・ 地域の組織 近所つきあい、上下関係、親戚
- ・ 言論の自由、民主主義の歴史

14. 論文構成のポイント

論文は、4つの部分からなる。必ず冒頭部で、目的と仮説を明確に書く。

目的と結論が対応していることが重要。

分析結果と結論は異なる。結果は事実、結論は自分の主張。

自分の主張が何かを明確に、かつ、結果と対応して書くこと。